

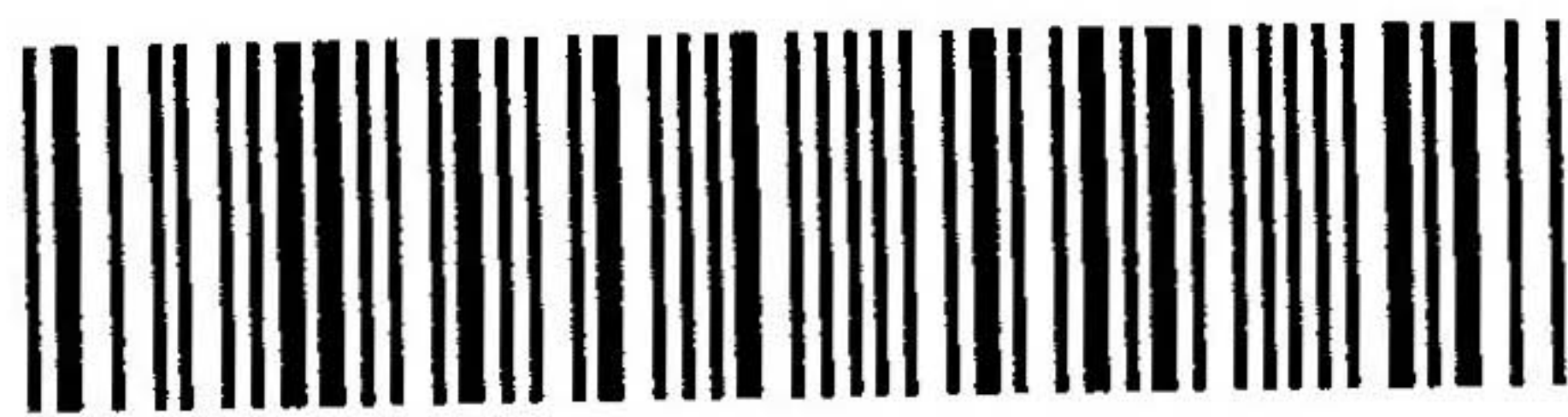
語り伝える  
京都の戦争

2

久津間  
保治

# 京都空襲

OKUZUMA YASUZI



655332790

かもがわ出版



## 第二章 東山・馬町空襲

昭和二十年一月十六日夜

その夜——京都盆地は、嚴寒期特有の嚴しい冷え込みの底に置かれていた。どの家々も申し合わせたように早々と表戸を下ろしていたが、毎晩のように聞く「警報」は出されていなかかった。このためか、あちこちの家からもれてくる淡い灯火が、冷え込んだ街路を薄く照らしていた。

時刻は午後十時三十分を過ぎようとしていた。と、突然に地軸を揺るがすかのように、鈍い震動が京都盆地の家々を襲った。どの家からも大きな、それでいて短い声を掛け合うのが聞かれた。あわただしく表





### 静寂の夜に沈む京都市街

戸を開けて路上に飛び出す人影もみられた。そのいずれもが、夜半の突然の衝撃音に、不安と、驚きと、そしていらだちの入りまじったかん高い声をはずませていた。だが、この衝撃音を伴った鈍い震動は、十数秒後には消え去った。そのあとには再び、夜の静寂が戻ってきた。この震動の消えた後、人々は、それが地震であったことを知らされた。ただ、震動の大きかったことから、かなりの震度のものであると声高に話し合っていた。

事実、この夜——昭和二十年一月十六日夜に京都市民の感知した地震は「震度3」の弱震であった。だが、市民の多くは「震度4」に近い感じで、この地震の揺れ方の激しさを受けとめていた。あわせて戦局の極度の悪化に伴うB 29大編隊の本土空襲の激化の渦中から反射的に「空襲だッ」と即断した人々も少なくなかった。だが、この即断は「警報」も発令されていない夜の静寂が戻ったなかで杞憂であったことを教えられたのだった。

地震といえは三日前の一月十三日、東海地方が大きな地震に見舞われていた。地震の被害は死者千九百六十一人、全半壊の家屋は一万七千戸にのぼっていた。だが、



この地震の詳細報は発表されていなかかった。軍の嚴重な報道管制下にあつたラジオ、新聞とも、慘状の報道は禁止されていたからであつた。それでも被災地から避難してくる人々の口から、地震の規模のすさまじさが伝えられ、また、旅行者が声を低めて話す一片、一片の言葉のなかから、同地方を襲つた巨大な地震の慘状がおぼろげながら人々の知るところになろうとしていた。

この地震の慘状も大きな衝撃であつたが、人々の多くは前年の年末から新年にかけて一層激しさを増してきたB 29大編隊の本土空襲に、より強い憂慮の念を抱き始めていた。B 29大編隊の本土空襲は、前年の十一月二十四日に、九十機の大編隊が東京を襲つたのが最初であつた。その三日後の二十七日にも六十二機、さらに三日後の三十日と十二月三日に計百機を超える大編隊が、いずれも東京を襲つていた。そして、十二月には五回にわたり、のべ三百七十六機が東京と名古屋を爆撃していた。

さらに新年の三が日の三日目に名古屋、九日には東京と名古屋にのべ百二十機の来襲が報じられていた。そして、これらの大編隊の来襲をみない日にも、単機か、二、三機の少数機による本土上空への侵入が相次いでいた。それは一月だけでも元日の一日を皮切りに二日、四日、五日、六日、七日、十日、十一日、十二日と続き、その度に侵入地域には相次いで「空襲警報」が発令されていた。

このようななかで京都市民が初めてB 29爆撃機の機影をみたのは前年の年末、十二月十八日の白昼であつた。この日、和歌山方面の上空から本土に侵入した三機のB 29が大阪、奈良の上空を抜けて京都の空に巨大な機影をみせたのだつた。もちろん「空襲警報」のサイレンの鳴りわたつた市内では、だれもが防空壕に避難していた。だが、その壕側から半身をのり出すようにして、はるか九千メートルもの上空を飛ぶ機影を幾人もの市民が目撃していた。



この初冬の京都の空に初めて望見されたB29三機編隊の機影は、それを見上げる京都市民に複雑な思いを抱かせていた。この少数機編隊は高度九千メートルの超高空を一路、東方に向けて飛行していた。その機影は思いのほか柔らかな曲線美に包まれていた。「優雅」と呼んでもよいほどのスマートな姿にもみえた。機は細長い胴体から、同じような細長い両翼が思い切って左右に伸びていた。その機影は折からの陽光を反射して白銀色に輝いていた。この機が開発される初期の段階で、米陸軍航空隊から特に「機体設計では美しい外形を持たせるように」との強い要望があり、設計図をひく米航空工学の権威もこの点には腐心したという秘話など、もちろん京都市民が知るよしもなかった。

ただ多くの市民の抱いた感情は、そのような詩的なものとはおよそかけ離れた、息苦しいまでの圧迫感に近いものであった。それは、この頭上の巨人機によって、いつ、どこに、いくつの投弾が試みられるのか……その思いを絞りつめるとき、だれもが言いようのない重苦しい圧迫感に襲われるのだった。だが、この編隊は一発の投弾もみることなく、やがて京都の上空を飛び終わると、比叡山のはるか上空あたりから滋賀県に抜け、さらに三重県から洋上に去ったことが、事後のラジオの「警報」で知らされたのであった。しかし、この日の出来事は京都市民の多くに、抑え切れない興奮をもたらす一事となった。だれもが口にしていた「本土決戦」の言葉が、間違いなく自らの身边に現実となつて迫ってきたのであった。このことをだれもが痛いほどに感じとる一日でもあった。

それにしても、すでにB29大編隊によつてくり返し空襲を受けている東京、名古屋など大都市での被害の様子は、なぜなのかほとんど知らされなかった。B29大編隊の空襲はその都度、新聞に大きく報道されていたが、そこには友軍戦闘機隊などの本土防空部隊の華々しい迎撃の空戦と、撃墜機数が大きく報道されるばかりであった。だが、市民の知りたいと思っている被害をめぐる報道はいつも「市内数カ所に火災



の発生をみるも、間もなく鎮火せり」との簡略な大本営の発表文が載せられているのみであった。これでは被災地の親類や知人の消息は一切、知ることも不可能であった。

この戦時下報道をめぐる軍の情報管制は徹底したものとなっていた。報道各社はまず、軍の発表文である大本営発表を最優先に報じ、そのほかに自社取材の報道もすべて軍の検閲を通してから紙面化が許される、という強い制約の下に置かれていた。そこでは「爆撃によって被害の広がった地域の写真は報道を禁ず」といった項目を皮切りに「投弾被害場所（家屋やビル、倉庫など）の拡大写真はこれを禁ず」「死傷した人物の写真も、これを禁ず」といった禁止項目が次々に指示されていた。また、被害写真や、それに関連した記事の禁止措置に加えて、広告面でも「爆撃による死者の死亡広告はこれを禁ず」とされ、さらに家屋の焼失による移転先の広告も「空襲によって家屋、社屋を焼失、破壊され、ために移転することを明記せる広告は、これを禁ず」と、空襲に伴う住民の被害については、公的な報道面でも、私的な広告面でさえも全面的に禁止する措置がとられていたのであった。

このため被災地の住民たちは、その惨害の激しさを自らの目にまぎれもなく焼きつけていたが、被災地から離れた他都市の住民たちにとっては空襲を受けた都市での被害の状況はまったく知るすべもなかった。被災都市から住民が避難してきたときなど、その惨状が語られたが、厳しい官憲の目が光る戦時下とあって、だれの語り口も細々としたものであった。

その夜——京都盆地を地震が襲った午後十時半すぎ、立命館中学校三年生、服部好宏君（一五）は自宅のふとんの中で地震の揺れを感じていた。服部君の自宅は通称「馬町」と呼ばれる東大路と渋谷街道の交差する東側一帯の住宅地にあった。木造二階建ての階下の部屋に服部君と妹、そして祖母の三人が、二階



に父の繁次さん（三八）と母タツさん（三九）が、弟の泰忠君（一〇）と一緒に寝ていた。服部君は――  
「地震の揺れは大きかった。自分はぐっすり寝込んでいたのに、その揺れのひどさで目を覚ましたほどであった。その揺れが収まったので、また寝ようとしたが、なかなか寝つかれなかった。それでもうとうとしながら再び、夢路をたどろうとしていた。そのときだった。夜の空に奇妙な音がするのに気づいた。それは爆音であった。しかもその音はラジオで聞かされる音によく似ていた。ラジオの音とは、国民の防空意識を高めるために米軍の飛行機のエンジン音によく似た音を録音し、NHKがそれをくり返してラジオで放送し『この音には注意ッ』と呼びかけていた音であった。寝床で耳にする音は、このラジオの放送で聞かされたB29爆撃機の爆音と酷似していた。その音はさらに大きく聞こえてきた。自分は体の固くなるのを感じた。だが、この夜はなんの警報も出ていなかった。そのことで自分は安心した。それでも警報の出していない夜に、どうしてB29のエンジン音に似た爆音が聞こえるのか、不審であった」

「そんな自分の家の真上のあたりで、爆音はさらに大きくなった。それは不気味なまでに深夜の空気を震わせた。その直後、自分はふとんから出していた頭を引っ込めるや、本能的に全身をふとんの中に潜り込ませた。そして、ふとんの中で息をひそめた直後であった。突如、至近に巨大な雷の落ちた衝撃音を聞いた。その鋭い音は何か、えたいの知れない物を思い切って大地にたたきつけたような音であった。同時に自分の体は寢床のふとんぐるみ三十センチも浮き上がり、いや家そのものが異様な力で持ち上げられたのを感じた。それらは、いずれも瞬時の間のことであった。耳のつぶれそうな巨大な音響とともに、ふとんごと持ち上げられた自分は、それがいったい何事なのか、まったく分からなかった。ただ、ふとんに潜り込んで身を縮めたままの自分の上に、重いタンスが倒れていた。このとき、自分の潜り込んでいたふとんが冬用の厚いふとんだったことで、奇跡的にケガを免れていた」





空襲を受けた民家の惨状



「数呼吸の後、自分はふとんからはい出した。部屋の中は真つ暗であつた。手さぐりで部屋の中を調べたが、家具のすべては倒れており、それらの間に粉々に割れたガラスの破片の散らばっているのを指先に感じた。その直後だつた。二階の階段の手すりをつたうように父が階下に下りてきた。よろめいている父の肩のあたりはぬるぬるとした液体に濡れていた。それはおびただしい血であつた。父は自分の無事を確かめた途端、その場にうずくまるように気を失つた。自分は父の下りてきた二階にかけ上がった。それまでまったく気がつかなくつたが、わが家の二階はなくなつていた。爆撃を受けたことは、もはや疑いのないことであつた。至近への投弾と、その直後のすさまじい爆風が、わが家の二階を瞬時に吹き飛ばしていった。だが、すべてが吹き飛ばされていたわけではなかつた。太い梁の一部は残つていた。だが、屋根はなかつた。思わず振りあおぐ頭上に月の姿をみた。厳寒の中天の月からさし込んでくる月光が、無残な姿に変わり果てた二階を寒々と照らしていた。そして、そこには即死した母と弟の姿が白く光つていた。自分は呆然と立ちつくしたままであつた」

修道国民学校の四年生、山村義明君（一一）も同じ夜、自宅のふとんの中で地震を感じとつていた。

山村君の自宅は服部好宏君の自宅と五十メートルも離れていなかつた。やはり「馬町」と呼ばれる住宅地の一隅にあつた。山村君は――

「その夜の地震は、ふとんの中の自分にとつて大きな地震に感じられた。家ではみんなが起き出してきた。父も母も、自分もいれて三人の男兄弟も姉も、だれもがびっくりした顔でふとんからはい出してきた。警報も出されていないので居間には電灯がつけられていた。近所の家々にも灯がついた。大きな揺れは地震であることがはっきりしたので、いま一度ふとんに入るべく、みんなが寢床につくことになつた。自分も



ふとんに入ったが、どうしたことかなかなか寝つかれないのに困ってしまった。それでもうとうとしはじめたとき、寢床の自分は変な音を聞いた。その音はいままで聞いたことのない奇妙な音であった。音は『シュツ』という、何かが空気を切り裂くような音であった。自分は不思議な音だなあと思った」

「その奇妙な音が消えた直後だった。突然、途方もない大きな地鳴りの音響に全身が押しつぶされそうになった。それは、いままで聞いたこともない大きな衝撃音だった。自分はびっくりして飛び起きた。家族のだれもが二階に寝ていたが、みんなが次々に起きて階下に下りてきた。そして表戸を開けて渋谷街道に出た。家は街道に沿って北側にあつたが、その街道沿いの南側に並んだ家々のなかで、約四十メートルばかり離れた家から猛炎が噴き上がっていた。そのとき、初めて気がついたことに、家族のだれもがはだしのままで、表の道路に飛び出していた。自分もはだしのままであつた。それに寝間着姿とあつて屋外の寒気がすごく冷たく感じられた。家族はいま一度、家のなかに入った。そして家の被害を調べると、屋外につくられていた階段が半分ちぎれたように吹き飛んでいた」

「爆弾は渋谷街道の南側に落ちたらしく思われた。立命館中学校に通う服部好宏さんの家が自分の家から五十メートルほど離れた南側にあつたが、その両家のちょうど真ん中あたりにも一発、落ちていた。その直撃を受けた家の人がどうなつたのか。深夜のこととして小学生の自分らには見当もつかなかった。爆弾はいくつも付近一帯に落ちていた。町内は急にあわただしくなってきた。かん高い人の声があちこちで聞かれた。消防車が来たのか、救護班の人たちが来たのか。人々の動きが騒然となってきた。四十メートル西側の火災は深夜の闇をあざむくかのように、猛烈な火の渦と化していた」

「あれは焼夷弾だッ、という声を聞いた。可燃物を詰めている焼夷弾を浴びると火勢は一気に強くなり、その燃え方は異様なほどに早かつた。このすさまじい火災とは逆に、この夜の寒気はすごく冷たかつた。



消防車の放水が始まったが、放水の水が道路に流れ始めるや、その水が間なしに凍ってきた。それほどに寒い晩であった。自分たち子供は消火の邪魔だツといわれた。そこに父の知人がかけつけてきた。その人の家が東大路通松原の近くにあった。そこに避難するよう父に言われ、自分たち子供は、この父の知人に連れられて、約五百メートルばかり離れた知人宅に身を寄せるため家を出た。一帯はもう重傷者を運ぶ担架班の人やら、消防署員らが入り乱れて騒然としていた」

## 東山・馬町一帯の惨状

このとき、時計はすでに翌十七日午前零時を過ぎていたが、馬町の周辺一帯では深夜の夜空を焦がすかのように、数カ所から猛炎の噴き上がるのがみられた。ただ、ここにどれほどの投弾があつたのか、それはだれにも分からなかつた。周辺一帯では寒気の厳しい暗夜のあちこちに重軽傷を負つた人たちのもらす悲鳴と、それらを助けようとするのか、大きな怒声が入り乱れていた。そして、出火家屋からの火勢は、時間の経過とともに、さらに広がりを見せようとしていた。この延焼をくい止めようとする警防団員の口からも、かん高い声が相次いでいた。この騒然とした現場のなかで、服部好宏君は――

「自分の家は、すぐ近くに落ちてきた爆弾で二階が吹き飛ばされ、一階に寝ていた母と弟が即死していた。そして、同じ二階に寝ていた父は重傷を負っていた。父の肩のあたりの出血はすさまじい血糊を流し続けていた。階下に寝ていた自分と祖母と妹は負傷しなかつたが、自分がすることはまず、父に傷の手当てを受けさせることだと思つた。このため自分は気絶したままの父を肩にかついだ。そして表に出た。道路に



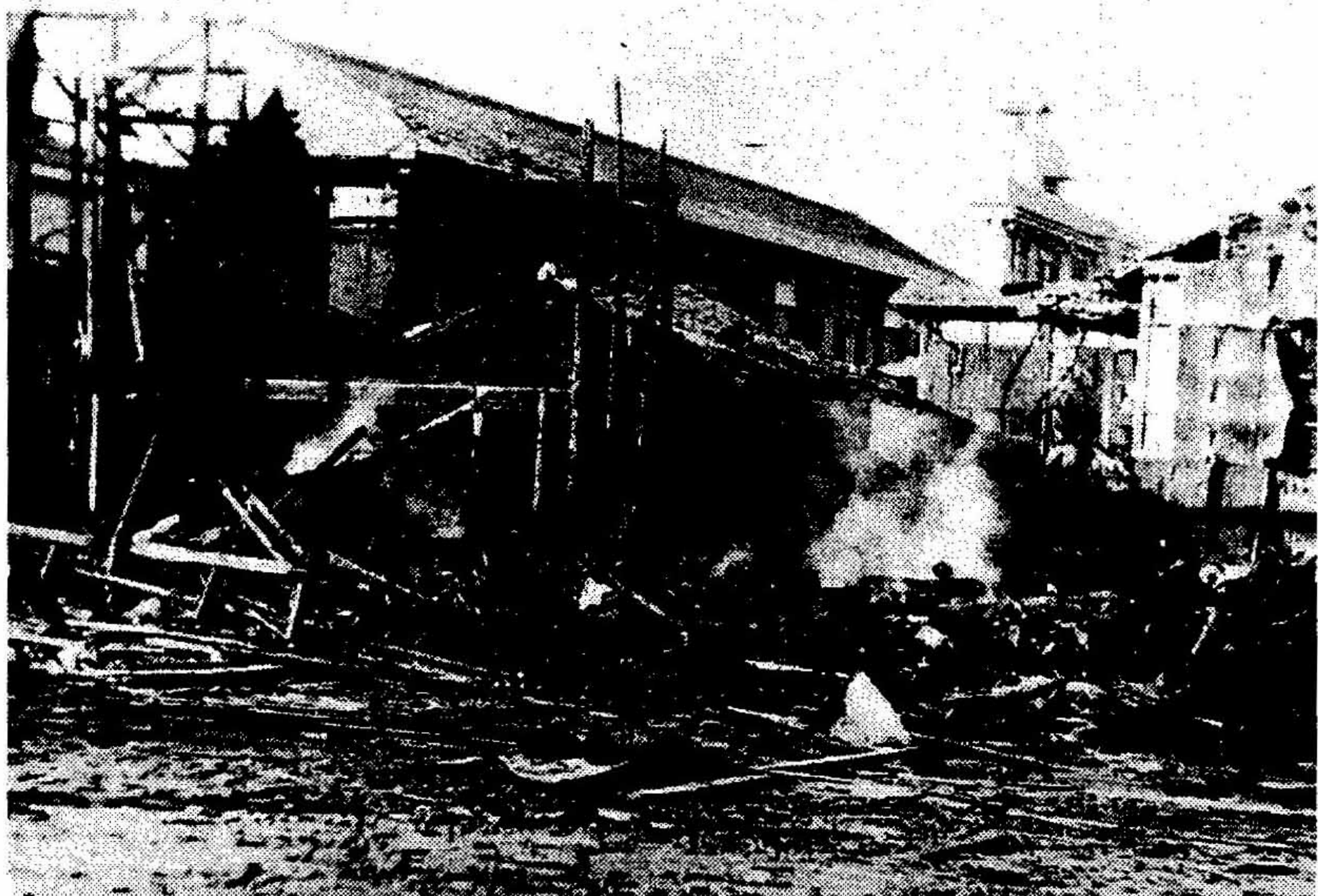
いた人たちが、修道国民学校に負傷者の救護所が臨時につくられた、と教えてくれた。そこに近所の人たちが担架を持ってきてくれた。父を担架に乗せて、自宅から百メートルほど離れた修道校に運び込んだ」

「臨時の救護所は学校の講堂内につくられていた。みると次々と重傷者が運ばれてきた。片足のちぎれた人がいた。はだけた胸から肩にかけてザクロのように肉塊がむきだした人がいた。だれもが目も当てられないほどに、ひどい傷を負っていた。講堂内は人いきれと血の臭いで異様な光景をみせていた」

「自分は、父の看護を救護班のひとにたのむと、家にとって返した。そして、祖母と妹の無事を改めて確かめると、家の被害を調べ直した。二階が吹き飛んだだけでなく、階下の廊下の窓ガラスなどもすべてくだけ散っていた。台所の水屋などもすべてが爆風で押し倒されていた。とにかく三人が体を休められるところを探した。雑然とした家の中ではあったが、階下の三畳の間だけがどうか体を横たえられそうに思えた。手伝いに来てくれた三人の大人も入れて、みんなで六人が三畳の間に体を横たえ、夜の明けるまで仮眠をとることになった」

「早朝、自分は始発の市電に乗った。そして千本寺之内近くの叔母の家へ急いだ。叔母は自分の突然の話にびっくりしていた。叔母と二人でまた市電に乗り、自宅への帰途を急いだ。だが、東山通から渋谷街道に入ろうとしたとき、軍隊が出動しており、物々しい雰囲気は一変していた。そこには『通行禁止』の張り紙と縄がはりめぐらされていた。自分は家に帰るので通り抜けようとした。だが、厳しい表情の兵士が『立ち入りは一切、認めないッ』といった。自分は半壊の家に妹と祖母がおり、母と弟の遺体がある、と説明した。だが、兵士は『命令だッ』と大声でいった。しかたがないので別の抜け道を探すことにした。自分の家の近くなので抜け道はいくつも知っていた。叔母を案内して抜け道から自宅に帰りついた。叔母は家の中の惨状にただ、声をのんでいた。そして、すぐ親類に電報を打たねば……と小さな声でいった。





被弾した住宅

自分は郵便局に急いだ。そして親類にあてて『バクゲキデハハシス』と電文をまとめた。だが、郵便局員の人は『気の毒だが、バクゲキの文字は禁じられている』と答えた。しかたがないので『ハハガシンダ』とだけの電文をたのんだ。いかに考えても要領を得ない電文であった」

翌一月十七日の朝が白々と明け始めたとき、馬町一帯の被爆による惨状が、人々の前によくその全容を現してきた。そこには、人々の予想をはるかに超えた建物の損壊と、多数の死傷者が見られた。しかも被弾の地域は馬町周辺だけでなく、市内の広い範囲にわたっている事実も判明した。ただ、最大の被爆地が馬町を中心にした地域であることには変わりなかった。

地元所轄署の松原警察署では、すでに前夜の投弾の第一報を受けて以来、署員の非常呼集を行い、続々と現場に署員を急派していた。そして、応援隊として、五条署をはじめ北隣の川端署や、市内の七条、堀川、中立、西陣などの各署からも署員の来援が続いていた。また、地元の警防団も被害発生の第一報を受けて以来、可能な団員のすべてが現場に急行し、破壊家屋の下から負傷者の救出や搬送作業に当たっていた。だが、その作業は深夜のこととて、平素の防空訓練時のように一糸乱れず、とはいかなかった。とりわ





投弾後の生々しい状況

け倒壊した家屋の下に埋められたままの重傷者を正確のなかから救出する作業は、だれもが初めての体験とあつて、気持ちのたかぶりが先行するの、作業は思うように進まなかった。それでも警防団員は、被災家屋を一軒ずつ調べては、家人たちの安否を確かめ、生き埋めになった人たちの救出に夜を徹していた。

一方、京都・伏見に本営を置く第十六師団司令部も「米機空爆」の第一報を受信するや、直ちに現場警戒隊の出勤に着手していた。その第一陣四十名の兵士が馬町一帯の被爆地域に到着すると同時に、先着の松原署員とともに一般人の「立入禁止」区域を定め、外部との連絡も一切遮断する、緊急立哨<sup>りっしょう</sup>配備についていた。

このような騒然とした現場からの被災報告が、十七日の夜明けとともに集計されつつあった。それによると米機の投弾による被災地区は東山区修道町をはじめ上馬町、下馬町など十カ町に及んでいた。また、死者は三十五人、重傷二十一人、軽傷二十八人、火傷五人など、人的な被害は八十九人を数え、全壊家屋が二十九戸、半壊百十二戸、ガラス大破百七十五戸と、家屋の被害は三百



戸を超えていることが判明した。さらに罹災者の総数は七百二十人にのぼることなども集計されてきた。あわせて投弾米機の行動をめぐっては「昭和二十年一月十六日午後十一時二十三分ごろ、B29一機が三重県上空から滋賀県を経て京都市上空に侵入、東山付近に二五〇ポンド焼夷弾一発、一〇〇ポンド瞬発性爆弾五〇発、および二〇ポンド瞬発性爆弾二〇〇発を投下せり。これにより東山区渋谷通東大路東入ル付近を中心に、投下爆弾は次々と爆発、炎上せるものなり」との報告がまとめられた。

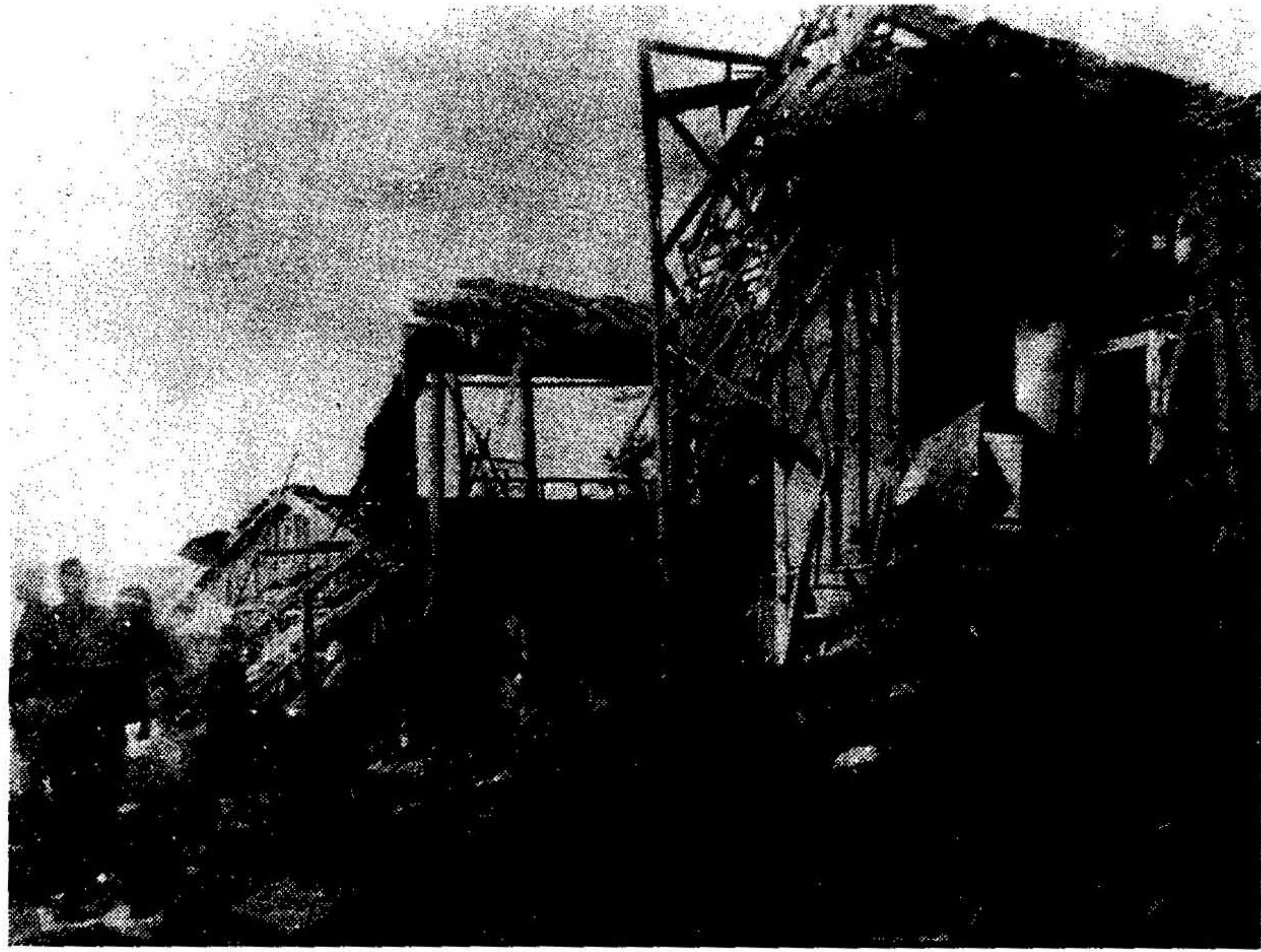
ここにいう瞬発性爆弾をめぐって、自宅の二階を吹き飛ばされた服部好宏君は、「夜間の投弾時には鋭い炸裂音と、猛烈な爆風しか分からなかったが、翌朝になって投弾の現場を見て不思議な感じがした。それは爆弾が落ちたところには大きな穴が掘りうがたれると教えられていたのに、そんな大きな穴が見えないのだった。二〇センチぐらい地面のえぐられた跡があったが、それだけであった。思うに弾着の瞬間、四方に強烈な爆風をひろげて、周りの建物や人間などをなぎ倒す爆弾ではなかったかと思う。いずれにしても、その夜の爆撃は、軍事目標を明確に探知してからの投弾ではなく、無防備な市民の住宅などへの無差別爆撃であったことは明らかであった。

この被爆現場へは十七日朝からさらに救援隊の増派がみられ、現場修復の作業は、松原署員六十名、警防団員五百名、在郷軍人会三百名、そして軍派遣の警戒部隊なども含めて一千名規模の大動員の下に瓦礫下に埋められた人の救出などが急がれた。また、この作業は投弾地区と外部との通行、連絡を一切遮断して進められ、全壊家屋の取り壊しや半壊家屋の部分解体と応急の修理も着手された。それらの作業と並行して遺体の身元確認と検視の作業もまた、急がれていた。

家族のうちから二人の死亡者をみた服部好宏君は――

「遺体は近くの智積院に集められた。爆撃時の被弾状態から顔かたちの分からない人もいたが、家族の立





倒壊した民家

はかわいそうだ……との意味らしかった。

いた」

ち会いではつきりと身元の判別できる遺体もあった。作業は一遺体ずつ、警官の立ち会いの下に身元が確認されていた。ところが、このとき、自分が数えた遺体数は三十二体であった。きちんと別々に送るのかと思っていたら、全部をまとめてトラックの荷台に乗せる作業に移ろうとしていた。いくらなんでも、遺体のすべてをトラックの荷台に積み上げるのは、ひどいことだと思った。だが、思い直してみるとこれらの遺体を前にした家族のほとんどは、自分の家が全壊したり、半壊している人たちばかりであった。葬式の準備をするゆとりもない人たちで、そうは言っても、死者にとつては、むごいやり方に変わりはなかった。遺体を満載したトラックは火葬場へ向かった。そして、このトラックに遺体が積み上げられるとき、祖母は小さな声で『下積みにならないでくれッ』と、くり返しつつぶやいていた。下積みとは、下の方に押し込まれてその言葉を何度も、祖母はトラックが走り出すまでつぶやいて

同じ馬町で被災した修道国民学校四年生、山村義明君は、投弾のあった夜に五百メートル離れた知人宅に避難し、一夜を明かした後、翌十七日朝には馬町の自宅に帰ってきた。彼は――



「自分の家に近づいてみると、東山通のところまで渋谷街道へ行く十字路に『通行禁止』のはり紙がしてあり、ロープが張られていた。自分の家は渋谷街道を百メートルほど東に入ったところにあつた。このため事情を話したが、立哨中の兵士が『駄目だッ』といった。それでは家に帰れないので、詳しく説明をくり返して、やっとロープの内側に入れてもらうことができた」

「家に帰ってみると、外からはあまり壊れているとも思えないのに、タンスやら壁やらに、やたらと小さな穴の開いているのに気づいた。よく見ると、それらはいずれも三十メートルほど近くで爆弾が炸裂したとき、そこから飛び込んできた破片の小鉄塊であつた。家具などに突き刺さっている小さな鉄塊は、注意してみると、不思議なことに最初の突き刺さった個所は小さな穴なのに、これが家具などの材質の中をら線状に、何かをえぐるようにして奥へ奥へと潜り込んでいた。そして、潜り込んだ後に反対側に突き抜けている穴も多かつたが、このときは最初に突き刺さったときの穴よりも二倍も大きな穴跡をつくっていた。前の晩の空襲のときは気持ちもたかぶっていたためにまったく気づかなかつたが、これが人間を襲つたときはどうなるのか。爆弾の炸裂直後の怖さをあらためて教えられたのだつた」

この馬町の一隅に、三島神社の神域の一部も含まれていた。神社は東大路通りから渋谷街道を東へ約百メートルほどの北側に位置していた。友田滋教官司（二七）は三年九カ月余の兵役を終え、父のあとを継いで神官の職について間なしのことであつた。兵役といえば、友田宮司は中国北部に展開する混成第四旅団独立歩兵第十二大隊の歩兵砲小隊に配属され、中国北部の戦野を転々とするなかで満期除隊となつて帰国していた。この独歩第十二大隊は、その後第六十二師団「石」兵団の中核歩兵大隊に編組され、友田宮司（軍歴兵長）らの除隊帰国後、中国から沖縄への配備を下命され、沖縄地上戦の決戦兵団として多大の



戦死者をみる運命にあったことなど、もちろん除隊帰国した若き宮司の知るよしもないことであった。友田宮司は――

「あの晩は、早い時刻に空襲警報が発令された。だが、それは解除された。そのあとに地震がみられた。かなりの揺れであった。自分のところではこの日、本殿の屋根替えの大修理を完成し、氏子たちが集まつて竣工祭をやっていた。その昼間の行事も終えて床についたばかりであった。大修理した本殿の屋根は地震の少々の揺れにも大丈夫で、ぐっすり寝ようかと思つたとき、頭上に爆音を聞いた。野戦の兵士の六感とでもいうのか、瞬間、何か異様なものを感じた。だが、警報は解除されたまま、新しい警報は何も出ていなかった」

「その直後だつた。神社の周囲一帯にすさまじい炸裂音を聞いた。神社の本殿も社務所も、何もかも打ちくだかれたかのような巨大な音響であつた。自分は寝ていた社務所のふとんを蹴つて飛び起きた。社務所は渋谷街道に面しており、その筋向いの街道南側に幼稚園があつた。自分が道路に飛び出したとき、眼前十数メートルのところの幼稚園に一弾が投下されていた。だが、それは不発のままであつた。それよりも南西四十メートルほどの民家への直撃弾は、弾着と同時にすさまじい炸裂の光景をみせていた。瞬時に破壊された家屋の残骸が、黒々とした陰影と化して夜目にもはつきりと視認できた。そこでは子供二人を含んだ家族四人が即死していた」

「さらに街道沿いの六十メートルほど西方の民家から、火山の噴火口のような紅蓮ぐれんの吹きあがるのがみえた。それは明らかに焼夷弾の炸裂発火したことを教えていた。周囲の闇のなかから、あちこちに悲鳴が聞かれ始めた。そのとき自分は、突然、言いようのない怖さに全身が凍りつくのを感じた。これが戦場であれば軍服をまとい、完全軍装して、そもそも作戦行動中は気構えが違つていた。これから弾の下をくぐる



のだツという張りつめた気持ちの状態では、怖さなど感じなかった。それが深夜、丸腰のまま、どこから降ってくるかも分からない爆弾の下にいる……と思った途端、自分は戦地よりも内地の方が数段も怖いと感じたのだった」

「自分は社殿にとつて返した。そして、暗がりの中で被害を点検した。直撃弾はないことを確認した。昼間に修理を終えたばかりの大屋根も幸いに大丈夫であった。だが、至近での爆弾の炸裂とその爆風によつて、社務所の雨戸も障子も吹き飛ばされ、本殿のなかの三方などもひっくり返っていた。そして、社殿と、その他の建物の被害調べを終えて、改めて社務所にしばし端座した。しかし、雨戸も障子も吹き飛ばされた社務所のなかには深更の冷氣に寒々としていた。ようやく自分を取り戻したとき、近くに救護にかけつけた警防団員の声を聞いた。警防団員の第一陣が被爆現場にかけつけてきたのが投弾後、三十分ほど経過してからであった。そして、時間のたつのにあわせて、その員数が増えてきた。あちこちで被爆者の悲鳴にまじって救護作業を始めた警防団員の声も、深夜の馬町一带にひろがってきた。火災を消すために消防車もかけつけてきた。一面、灯火の消えてしまった現場では、出火した民家からたちのぼる火の手が異様に大きく、何かぎらつくように感じられた。その火の手に照らし出された先着消防車の、三台の車両があわただしく放水するのがみられた」

「その晩の寒気は異常に厳しいものだった。こんな寒い晩もあるのか、と思うほどに冷え込んできた。警防団員も寒さにふるえながら救護作業に当たっていた。その彼らが小憩をとるとき、どうしても暖をとらないと体が冷え切ってしまうほどに寒かった。彼らはたまらなくなったのか、近くの道路上に散乱したままの窓枠や障子などを集めてきて暖をとり始めた。自分も『大変だろう』と、その労をねぎらいたい気持ちになった。だが、ふと気がつくとき、彼らのたき火の輪のなかで勢いよく燃えている障子の棧に見覚えが



あつた。それは社務所から道路上に飛ばされたものであつた。あわてて止めようとしたが、あとの祭りであつた。障子のほとんどがすでに火の輪のなかに投げ込まれて、ほとんどが灰になつていた。被災したこちらにとつては、吹き飛んだ家具を集めに行く前にみんな燃やされており、大弱りであつた。実はその前に、神社の社務所などの雨戸も吹き飛んでいた。この吹き飛ばされた雨戸と、神社のなかに残されていた雨戸のすべても、重傷者を運ぶための急造担架用に持ち出されていた。これでは神社も丸裸であつた」

こうした深更の騒然とした救護作業が一段落し、夜の明けそめてきたことを知らせる薄明が馬町一帯に訪れてきた。友田宮司は――

「そのとき、燃え残りの障子の火をかきわけながら暖をとつていた警防団員たちが声高に話し合つていた。神社から四十メートルほど離れた民家の直撃弾跡では、くずれ落ちた瓦礫の底の方に子供が埋められているかもしれないと何回も掘り返し、そこに二人の子供の遺体を見つけ、これを収容したという。また、修道国民学校に急造された救護所は、救護活動が本格化するにつれて、間なしに床一面が重傷者でいっぱいになつたという。収容する場所が足りないので、近くのお寺さんを借りて、ここにも幾人かの重傷者を運び込んだという。そんな救護作業のなかで、一人の警防団員は『真つ暗ななかで突然、片足に何かがまといつてきた。よくみると、人の手が自分の足にまといつていた』といつていた。これは瓦礫の下に倒れたままの重傷者の一人が、声を出す気力も失せ、最後の力をふり絞つて警防団員の片足をつかまえていたのだつた。これには警防団員も『本当にびっくりした』といつていた」

こうして夜の明けた馬町一帯の被爆家屋跡では、だれもがまるで放心したかのように呆然としていた。深夜、突如として自分の家を壊されたり、焼かれたりした人々の胸中は、言葉にはいえない非情なものであつた。何から手をつけてよいのか、思いもつかない人々の姿を、十七日の朝陽が白々と照らしていた。



## 地獄絵と化した被災家庭

この「京都空襲」の事実は翌十七日の新聞には報道されなかった。軍と警察は、この報道をめぐってきわめて慎重な態度を持していた。被爆地の周囲を交通遮断して、兵士たちを動員しての警戒部隊を配備したことも、そのような厳しい方針の一環と思われた。だが、一部の市民の間では「東山に爆弾が落とされた」「死者も出たらしい」といったささやきの声がひろがりつつあった。それらは、もちろん限られた市民たちの間の会話であったが、これを放置しておく、広い範囲への流言飛語化する危険も察知された。

このことも考慮するなかで、軍と警察は「空襲」の事実の公表に踏み切ることになった。ただ、公表の内容はあくまで空襲のあった事実を明らかにするにとどまり、被害の詳細は禁じる措置をとることになった。こうして「京都空襲」の報道は翌々十八日の朝刊に解禁され「昨夜半B29一機 京都市に侵入、投弾」の見出しの下に、初めて概要が報じられた。あわせて、同じ紙面上には「京都も戦場なり」の大きな活字がおどる紙面となっていた。その記事は――

「マリアナ基地よりB29一機が十六日午後十一時半ごろ京都に侵入、京都市内の一部に爆弾を投下、家屋などの倒壊をみたが、被害は軽微にして、市民の士気は極めておう盛、皆の動揺もなく、職場に挺身している。十六日深更、来襲せる敵機が京都市内の一部を盲爆するや、時を移さず一部部隊が出動、現場において治安警備をはじめ復興作業にめざましい活動が続けた。また、十七日午後一時半から、京都師団師团长以下幕僚たちが被害現場を視察した」



この紙面をみるかぎり、空襲に伴う被害の詳報は、死亡者数も、全半壊家屋の戸数も、すべてが「秘匿」のベールの下に置かれ「被害は軽微にして」の八文字に代えられていた。そして、同じ日の紙面を大きく飾ったのは新居防空本部長（府知事）の談話で、大きな見出しが「敵機は常に我頭上、深夜の灯火管制に細心の注意」と飾るのを受けて、次のように述べていた。

「十六日夜半、敵一機が京都に侵入し市内の一部を盲爆したが被害は極めて軽微であつた。ただ若干の犠牲者を出したことは、まことに遺憾にたえないところであつて、深甚なる哀悼の意を表するとともに、その仇は必ず我々の手でとる決意を誓うものである。今回の空襲によつて、我々は警報発令前に敵襲のありうることを肝に銘じ、いつ、いかなる場合に空襲があつても、これに応じうるよう各自、これに対する万全の策を常に講じておかなければならない。（当夜の）埋没者、負傷者の救出、救護、ならびに消火消防等に対し防空関係者、および付近市民各位の敢闘は実に日覚ましいものがあり、これ即ち、平素の訓練の成果と防空敢闘精神の發揮によるものである。敵機はまた必ずやつて来る。市民各位は防空態勢をますます厳かにし、深夜の灯火管制には細心の注意を払うべきである。また、深夜の空襲に伴う暗闇下の防空活動には平素から周到なる準備を要するは言うまでもない。市民各位はますます憤激を新たにし京都も戦場なり、我々もまた前線将兵の奮闘敢闘に続かんの意気をもつて、各職域に懸命の御奉公をせられんことを切望してやまない次第である」

新居知事の談話はこのような内容であつたが、そこには被害の実情について「極めて軽微」と述べ、また「若干の犠牲者を出した」と語つたのみで、声明のほとんどは今後の空襲への注意と、さらなる敢闘精神の高揚を強調する内容となつていた。



この馬町一帯が深夜の空襲に見舞われた日、大野竹治郎さん（四四）は町内会長の職にあつた。戦時下の町内会は、それ自体が強力な銃後組織の一環として位置づけられ、会長には多様な権限が与えられ、同時に重い責任をも背負わされていた。



被弾直後の状況

大野会長は同夜の空襲の体験を通じて戦後、多くの関係者と面接し「馬町空襲の全容」を調査し、自らも京都府立総合資料館と「京都空襲を記録する会」の合同調査（昭和四十九年）にも協力して、同夜の情景を以下のように述べている。

「（その夜は）別に警報も出ていないので一般家庭も自分の家も電灯は消していなかった。（飛行機の爆音が聞こえたときも）日本軍の飛行機と思って安心していた。妻は『アメリカとちがうか』と、音の判断から言っていた。その矢先、急降下の音。それは異様な金属音で、その瞬間大爆音と爆風をともしなつたすさまじい筆舌につくせない音だつた。やっぱり敵機だ。『やられた』と思い、これは大変なことだ、二階の子供はどうだろうか、町内隣近所はどんなことになつたかと思うので、すぐに起き上がった……道路へ出ようと思つたが、爆風で家の戸、障子、ふすまなど全部もぎ取つたようにはずれている。それを踏んで庭へ出た。棚という棚は全部落ちていた。やつと門前に出たとき警戒警報のサイレン。実に馬鹿げたことと



思った。訓練のときは、警戒警報が出て空襲警報、次に空襲、焼弾が落ちることになった。……  
はその反対、実に残念というか、くやしい限りであった」

「すぐ西の町内で焼夷弾によるのか火の手が上がっていた。東隣は半壊、その次から三軒は全壊、その裏十軒ほども全部つぶされて、冬の寒い晩のこと、ほとんどがこたつを入れているので、あちこちでくすぶっていた。……防護の役をたのんでいた町内の人はだれもこない。こないはずだ。家の下敷きになって死んでいる人、けがをしている人などで、他の町の救援をたのむより仕方なく、大声をあげて東に西に走ったが、これも一人二人は心配そうにきたが、何も間にあわぬ。……そのうちに学区内の警防団や軍人会が続々と救援に、他学区の団体もどんどん来てくれ、大活動をしてくれた。家が倒れているのに火の手の上がらないのは不幸中のさいわいであった。それでも電灯は全部消えている。水道は出ない。くすぶっているとところへ家の風呂の残り水をかけたりして難をのがれた。また、その夜は実に寒く、水はすぐ凍った」

「ようやく不安な一夜の明けた町内は、見る影もない。なぜこのように自分の町内に爆弾が落ちたのかと、涙が流れて仕方がなかった。やがて警察より呼び出しがあつて、死亡者の検視に立ち会えとのこと。誰が、誰だかわからぬという。つらい役だと思つたが智積院へ行つた。三十六遺体が並んでいて、私はこれは誰だ誰だというと、立ち会いの警官が名前の札を置くのである。焼けただれて形も分からぬ人。頭の割れている女の子。それはそれはこの世の地獄だった」

大野町内会長は、この証言のほかにも、自らの体験をもとに馬町一帯の被爆者のことを調べて、膨大な証言記録を収集していた。あわせて空襲直後の現場写真も集めて「これを新聞社に持ち込んで、その保存方をたのむ努力」(家族の話)なども続けていた。



このように大野竹治郎会長が「警報もないまま、いきなりの爆撃とあつて平常の防空訓練とはまるで反対であつた」ともらしていたが、このことはひとり大野町内会長だけの疑問ではなく、同夜の空襲で肉親を失つたり、自宅を焼かれた被災市民ほとんどの気持ちでもあつた。確かに、それまでの防空訓練ではまず警戒警報が発令され、「敵機が来襲するかも分からない」との警戒予告から訓練は開始されていた。そして、空襲警報が発令され、「敵機は必ず頭上にやってくる」との指示に、一般市民の防空壕への一斉避難と、防護隊への出動準備が急がれていた。そして「空襲警報」の発令後、しばらくして「爆弾投下あり」「消防活動開始」「負傷者救護急げッ」などの手順が次々と進められ、最後に訓練講評を聞いて終了するのが常であつた。

このような民間人による防空体制は、各地区や職場、学校で班編成のかたちで進められており、その主力は各町内の壮年男女の組織体である隣組防空隊をはじめ警防団、特設防護団、学校報国隊、特設救護隊などに分かれていた。こうした国内での民間防空体制の強化は極めて重要な任務とされたが、それに先立つて、本土への侵入を図る米機編隊を一刻も早く発見することの重要さも、すでに大戦の直後から声高に叫ばれていた。

だが、四囲を海に囲まれた日本本土の地勢は、防衛正面と目される千島列島の東方から、沖縄の東方海上を結ぶと実に三、〇〇〇キロの長大な距離となっていた。この広大な東方洋上からの米機編隊の奇襲を阻止することなど、到底不可能と考えられていた。しかし、日本海軍は大戦の開始とともに、この本土東方の洋上に特別警戒線をつくり出していた。それは本土の一、二〇〇キロ東方の洋上に、南北に長く常時、五十隻の監視艇を配備する作戦であつた。この監視艇には一〇〇トン余の漁船を徴発し、これに強力な発信機などを特別に装備させ、各艇間は五〇キロの間隔を保つたままの線上に五十隻が一本の糸のように展







報とあわせて、電波警戒機を搭載した警戒艇も洋上に配備されていたが、米艦載機の来襲が相次ぐ戦況下に、本土南方洋上での警戒艇の活動は大幅な制約を余儀なくされていた。それでも本土南岸一帯に設営された監視哨の活躍で、侵入米機の捕捉は報じられていたが、夜間の単機、または少数機の侵入には無警報の事態の発生もみられ、京都上空への侵入機もこのような防空監視網の間隙を突くものであった。

この夜の爆撃の被災者の一人、井上文子さん（三三）は――

「来客のため眠りについたばかりの一家のものは、投爆のため破れた柱や壁の下敷の中で目が覚めたのでした。でもそのときは、みなそれぞれ負傷をしていたのでした。主人は顔面と手足に、私は左眼に、中学二年で十五歳の二男孝哉は破片貫通のため右足の脛骨や、腓骨も肉もろとももぎとられ、完全骨折を受けたのでした。そして小学校五年で十二歳の娘は即死、さいわいにも二女で小学校二年で八歳の佳子だけは無傷で助かったのでした。主人の義弟がきていまして、ガラスの破片が眼球にささり片眼失明でした」

「足の骨の折れた二男は、担架で小学校へ運ばれましたが、傷の手当てもしてもらえず、市内の病院に転送されました。私は目から血が流れていましたが、自分のことなどかまってはいられません。息子の傷と痛がる声を聞いては、何も考えるどころではありませんでした。壊れた家の中には、即死した娘をそのままにしていましましたが、かまっつてやることすらできませんでした。二男はこの病院で仮手当てを受け、明け方になってから府立病院の外科病棟に正式に入院し、治療を受けることになったのでした」

「生活必需品である炊飯用のなべ、こんろ、お茶わんなどは、市当局からの配給を受けましたが、居住町内会からの配給を受けることが少なかったので、子供に栄養補給食を与えることができず、骨折の治療にもさしつかえることが多くありました。そのため主人は休日になると、魚や煮干しの買い出しに、遠く三重県の方まで出かけました。息子の脛骨がのびてつながるまで、おもりで常に足を引っばっている姿をみ



るとき、本当に米国が、軍が憎くてしかたありませんでした」

この二男の孝哉君の入院はその後も続いていた。そして「十月十五日に松葉づえに頼ってやつと歩くことのできる子供と片目の私が退院したのです。本当に長い九カ月間でした。それからまた、こんどは母子の通院が続いたのです」という。

こうして爆撃を受けた一家の悲劇は、その後も尾をひいたまま年を越し「一家五人がまがりなりに一緒に暮らせるようになったのは、二十一年の四月からでした」という。（大野竹治郎さん、井上文子さんの証言は、高橋伸一監修、小林啓治・鈴木哲也著『かくされた空襲と原爆』つむぎ出版、一九九三年刊を参考にした）

このようにして重傷を負った被災市民は、大学病院をはじめ市内の病院に分散収容され、それぞれが手当てを受けていた。だが、患者とその家族にとっての悩みは、食事情の極度の悪化が回復を大幅に遅らせたことであつた。同じように重傷を負った服部好宏君の父親の繁次さんも、市内の病院で入院生活を続けていたが、服部君は「父の病状はなかなか快方に向かわなかつた。入院の日々は本当に苦しい日々となつた」という。こうして空襲のもたらす惨状は、深夜、突如として投弾によって生命を断たれ、大野町内会長のいう「頭の割れた女の子」の姿を直視しなければならぬ事態とともに、重傷を負った市民はそれぞれが痛々しい傷跡をひきずるように、それからの日々を生きていかなばならなかつたのであつた。

馬町一帯の空襲に伴う投弾直後の被災地の模様と、事後の対応をめぐる『かくされた空襲と原爆』は、さらに続けて――

「修道応急救護所に収容した死者・重傷者以外のものは、十七日百七十名、十八日五名、十九日五名で、最後まで残つた五名は、一月二十日をもって、それぞれ各方面に折衝引き取らせた。なお、被災者に対し



米穀、その他を特別配給した。自己の居宅を全部破損され居宅不可能で移転先あるものは、全家族移転するものよりさきとし、トラックをあつせんした。本事務は一月十八日当初において取扱件数三件あり、この行先は、下鳥羽一、伏見一、滋賀県水口一。一月十八日以降は府輸送課員が出張してこれを行なった。破損した水道・ガス電気等は、水道一月十七日正午、電気ガスは一月十七日夕刻までに応急復旧をみた」

(松原署沿革録)

「これらの救援は、一九四二(昭和十七)年に定められた、戦時災害保護法によって行なわれていました。この場合、医療費は基本的に無料となっていました。法律で定められた救護期間は最大二カ月とされていたため、井上さんのように(救護期間外の治療を続ける場合)治療費の多くを個人負担しなければならぬ人も少なくなかったのです。また、この空襲で妻と子を失い、自らも重傷を負った服部繁次さんは、空襲でいたんだ家の屋根を(緊急)工作隊に修理してもらっています。このときの修理費は自分で支払わなければならなかった、とも証言しています」

被爆した民家

「警察の資料(松原署沿革録)では、特別配給があつたと書かれています。その詳しい内容はわかりません。ただ、服部さんは『差し入れ人は不明』のみかん二十個、紙一締め、かんづめなどが届いたとも証言していますから、これ



が特別配給であつたとすれば、その被害に比べて実に微々たるものであつたといえます。義援金として、一月二十一日現在で六千三百五十円が集まつたとも書かれています。……巡査の初任給が月額六十円としてみると、死亡者一人ではその月給の三カ月分、被災家屋一戸にすれば月給の八割です。……この他、当時の金で六円（現在の一万五千円あまり）が下賜金として配られたとの証言もあります。……いづれにせよ少額で、被災者の証言にあるように、補償は少なかったというのが事実です」

「ところでこの空襲は、京都で初めての空襲であり、しかも夜ふけ、警戒警報も出ないままに突然爆撃されたものだったため、警察などは、人々が動揺することを怖れました。松原署の記録によると『人心安定のため』という名のもとに、警備本部の報道班によつて『デマをとばすな』『デマにまよふな』『流言は敵の謀略だ』『口をつつしみすぐ敢闘だ』『被爆地の写真撮影を禁ず』『この敵を増産で撃て』といったビラが張り出され、嚴重な報道管制がしかれ……新聞にも、被害地については『京都市の一部』としか示されず、多くの市民は詳しい様子を知ることができませんでした。一般の人が現場に立ち入ることは禁じられ、また、目撃した人が、被害の様子を口外したり、手紙に書くこともできなかつたといひます」

「空襲からしばらくは、新聞の紙面に『活かせこの貴い教訓』『被爆して知る常在戦場の心構へ 全府民が対空監視へ』『固めん防空生活』『就寝は準防空服 警報、爆音で臨戦準備へ』などの見出しがならんでいました」



## 名刹も襲つた投弾の爆風

この馬町一帯の空襲では同地域内の三島神社の被害が報告されてきたが、寺院にも被害の発生したことが判明した。それは名刹として知られる天台宗の尼寺、香雪院であつた。上馬町に位置した同寺は関西三大聖天のひとつとして名高く、その歴史も約三百年前、堯恭親王が妙法院内に持仏堂として建立し、慈覚大師が中国から持ち帰つた如意宝珠尊を本尊として安置した尼寺として広く知られていた。

住職の中島湛海尼（三〇）は七歳のとき、香雪院の養女となり、同寺から修道小学校、京都高等女学校を経て二十五歳の若さで住職となつていた。だが、その修行時代は、夏は午前四時、冬でも五時には起きて、本堂の拭き掃除から毎日のお勤めをする苦行に耐えていた。湛海尼は――

「その晩は大層に冷え込む晩でした。あまりに寒さがきついたので、はやめにおふとんに入りましたが、夜の更けるのにつれて冷え込みは一層きつく感じられました。そこへ地震の揺れがやってきました。書院の六畳の間に寝ていました私は思わず、おふとんを頭までかぶつて地震の揺れの収まるのを待ちました。それから間なしのことでした。静かな夜の空気を切り裂くような大音響が、すぐ近くに聞こえました。びつくりしました。いままで聞いたこともない大きな音なのです。その大きな音が途絶えてすぐに、部屋の中が言葉でいえないほどに寒くなつてきたのです。思わず震えながら元懐中電灯を手にししました」

「電灯の淡い輪のなかに照らし出されたのは、いつも見慣れた部屋の畳ではないのです。そこにみたのは針の山なのです。いや、針の山にみえたのは大小無数に砕かれたガラスの破片で、それが私のおふとんの



周りの畳の上を埋めていたのでした。もう、びっくりしました。すぐに足袋をはきました。そして、その上にスリッパをつけまして、このガラスの上を踏みながら廊下に出てみました。そこも大変なのです。障子は倒れており、ふすまは飛んでしまつて見えないのです。そのとき初めて近くに爆弾が落ちたのか……と思ひました」

「でも、ここはお寺なのです。お寺をめがけて爆弾を落とすなんて考えられません。それにお寺の関係者の間では『アメリカはお寺を爆撃しない。なんでもそんな条約があるそうだ』と聞かされておりましたので、頭から空襲とか、爆弾とか思い浮かんでこなかったのです。そして、大きな音響の直後に、おふとんの中で急に寒さをきつく感じたのが、これで分かりました。部屋の周りのガラス戸だけでなく、書院の障子も、ふすまも、雨戸もみんな爆風で吹き飛ばされていますので、書院の中は部屋の建具を取りはらつた後の丸裸の状態に一変してしたのでした。これではおふとんを頭からかぶつていても、寒いのが当然でした」

「その書院の近くに、いくつか火の手のあがるのを見ました。爆撃で火事が起きたのだツと思ひました。でも、近くの家のどこに、どれほどの爆弾が落ちたのか、外は暗くて分かりません。ただ火の手のあがつたあたりだけが赤々と照らされておりました。その直後でした。お寺の門前で急に大きな声を聞きました。門を開けて出てみますと消防車が来ておりました。そして、消防士の方が『お寺に井戸があるはずだ。それを使わせていただきます』と言われました。そして、消防車からホースを延ばされて庭に入つて来られました。お寺の庭には立派な井戸がありました。それがご近所の火事を消すのにお役に立つたのでした。でも、それからが大変でした。爆撃直後の火事は一刻も早く消し止めなければなりません。お寺の前に止まつた消防車から、ホースを延ばしていられた消防士の方も必死の表情でした。幸いにもお寺には深い井戸が二本ありました。ここから消火の水がひかれ、近くで燃えている民家への放水が始まりました。消防



車はほかにも来ていたのでしよう。火の手は次第におとろえてきました。そして、鎮火したのか、火の手はまったく見られなくなりました。お寺の井戸がご近所の方々の役に立って、ほっとした気持ちになりました。そのとき、ふと気付いたのですが、お寺の屋根先につららが下がっておりまして。それは消防の方が延焼を防ぐために、周囲の家々にも水をかけられ、お寺にも延焼防止の水がかけられていました。それが、間なしに凍りついていたのです。それほどに冷え込みのひどい晩でした」

「これで火事の方の心配はなくなりましたが、爆撃を受けて家を壊された方々は、この寒い夜に大変だろう……と思いました。お寺も障子や雨戸やガラス戸など、ほとんどの建具は爆風で吹き飛ばされましたが、建物自体は本堂も書院も庫裡もつくりががっしりした建物だったので、倒れたり傾いたりはしませんでした。でも庭に出て分かったのですが、屋根がわらがたくさん落ちています。爆風で屋根からはがされて落ちてきたらしく、これらが壊れたまま庭を埋めているのです」

「夜はまだ、明けてきません。建物自体は本堂も庫裡も大丈夫だったと申しましても、障子やふすまなどの建具をほとんど吹き飛ばされて、お寺の中は寒いのです。その冷え込みに我慢していた私の耳に、門前のあたりで何か、声高に呼ぶのが聞こえました。また、消防の方かと思っ出てみますと、こんどは警防団の方々でした。警防団の方は『この辺ではほとんどの家が全壊か、あるいは半壊の状態だ。広い建物で、頑丈に残っているのはお寺だけだ。被災者が寒さにふるえているので、一時避難所にお寺を貸してほしい』と申されました。私はご近所の方々に少しでもお役に立てば……と思ひまして承知しました。しばらく待っていますと、警防団の方が指示されたのか、焼け出された方だとか、家を壊された方々が三々五々と門を入って来られました。皆さんを一番大きな建物の庫裡に案内していますと、二十人ぐらいいになりました。でも、そのあとからあとから、まだ来られまして、ついには五十人にもなってしまうました」



「その晩は本当に寒い晩でした。被災されたご近所の方々には、せつかく庫裡に入っていたただいたのに障子も雨戸も吹き飛んでいますので、寒々とした夜風が吹き込んでくるのです。だれもが夜中の突然の空襲で被災されましたので、着のみ着のままの姿なのです。皆さんが寒さにふるえていらっしゃいました。これは、なんとかしなければいけないと思いました。とにかく風を止めようと倉庫に入って遮断幕のようなものを探しました。そこで見つけたのが、お寺での行事などで使います大きな幕でした。これを取り出しまして被災者の入られた部屋の四方を囲んで、わずかでも冷たい風の入らないようにしました。この大幕を張りめぐらせている間に、うつすらとですが夜の明けてくるのが感じられました」

「夜が明けて参りますと、それまでの暗闇では分かりませんでした。ご近所の爆撃跡が目に入ってきました。馬町の一帯はもう、大変なことになっていました。朝はすっかり明るくなりましたが、壊された家々の姿に胸が痛くなつて参りました。それに被爆の方々は朝になつても食事がとれません。ご飯もおかずも、お茶わんもないのです。そんな私たちのところへ炊き出しのお握りが届けられました。どなた様が炊き出しされたのか分かりませんが、庫裡の中の五十余人がこのお握りを手にしました。そして、だれもが声を立てることもなく、ただ黙つたまま口で運んでいらっしゃいました」

「だれも声を出さない」と申しましたが、声の出ないのも当然なのです。私自身もこんなに壊れたお寺をどうしようかと思つただけで、気の遠くなるほど院内は雑然としているのです。それは、自分の家が突然に壊れたり、焼けたりしてしまつた人の気持ちとして、呆然という言葉しかかなかつたと思いました。このように呆然としていられるのは、被災された方々だけではありませんでした。五十余人もの被災の方々をお寺に迎えた私自身も、そのうちの一人だったので。夜が明けましたお寺の中は、爆風に飛ばされました屋根瓦だとか、障子やら雨戸やら、もう足の踏み場もない状態なのです。そんな状態を前にした私は、





被災地を視察する係官

何か順序だつて片付けて行かねばならない……と思ひながらも、何から手をつけてよいのか分からないのです。何をどうしたらよいのか、頭の中で対応を考える力と申しますか、考えをまとめる気力が出てこないのです。私も実は呆然として、惨状をただ見ているだけの一人だったのでした」

「そんな私たちの耳に『被災地一帯には縄張りがしてある』との噂が入ってきました。空襲を受けた私たちの町のなかには入れないように、外から縄が張られたとのことでした。この噂は本当でした。それは知人の方が、この縄をくぐつて見舞いに来られたことでわかつたのでした。その方は『町の周りには縄張り

がしてある』と言われました。私が『どうして入れたのですか』と聞きますと、その見舞いの方は『一回目は縄張りのところで兵士に呼び止められ、入れてもらえなかつた。そこで、自分は京都市長と親しかつたので、こんどは市長の公用車を借りることを思いついた。市長の公用車でやってくると、縄張りのところの兵士も簡単に入れてくれた』と言つていられました」

「その後も次々とお見舞いの信者の方々がみえるのです。どのような間道があつて、それを探しては入ってきた、と申されていました。そんな信者の方々の励ましの言葉を受けています間に、私の頭の中に少しづつ後片付けへの順序だつた考えが戻ってくるのを感じました。気力が回復してきたのでした。そして次の日から、被災の方々のなかで親類や、知人宅へ移られる方がみられ始めました。でも行き先のない方はお寺の廊



下にコンロを置いて不自由な自炊生活を続けていられました。それでも一カ月後には七割ほどの方が行き先をみつけて行かれました。そんななかで十六人の方はなおも辛抱されておりました。そして、これらの方々がすべて行き先をみつけれられたのは、空襲から三カ月もたった日のことでした」

## 京都女専の生き埋め救出劇

こうして東山区馬町一帯への空襲は、一般の民家をはじめ神社、寺院にも被害をもたらしたが、投弾の一部は学校にも命中する無差別爆撃となっていた。この学校とは京都女子高等専門学校（現京都女子大）で、投弾はその寄宿舎に命中し、倒壊した寄宿舎の瓦礫の下で深夜、生き埋めになった寮生たちの救出作業が急がれていた。同女専三年生、渡辺美世子さん（一九）は――

「私たちはそのころ、学徒勤労動員で『報国隊』の名のもとに、西大路三条の島津製作所三条工場の旋盤工になっていました。工場では飛行機に取り付ける計器の一つで、ちようど中指ぐらいの細長い軽金属の棒のなかをくり抜く仕事に従事していました。毎日が寮と工場を往復する日々だったのでした」

「そんな毎日のなかで一月十六日の夜を迎えました。空襲はまったく突然にやってきました。深夜、突如として耳をつんざく音に目を覚ましました。みると部屋のガラス戸は吹き飛び、天井の梁がだらんとたれ下がり、まくら元には一面、ガラスの破片が飛び散っていました。戸外をみますと、昼とみまがうばかりの明るさなのです。私は寒さと恐ろしさで歯がガチガチ鳴るのを覚えました。と同時に『空襲だッ』という思いのなかで、『南無阿弥陀仏』と声にならない声で唱えておりました。この日は奇しくも親鸞聖人の祥



月命日でした。私は、実は夜の就寝前、お勤めのお仏参をさぼりたくて押し入れに隠れていたのです。でもなぜか急に気になりました、遅ればせながらお勤めに参加していました。追いたてられるようにお仏参へ出たのも、何かの因縁でしょうか。部屋の者はだれ一人、けがもありませんでした」

このとき、渡辺美世子さんの宿泊していたのは第一錦華寮であった。寮は至近に炸裂した一弾のために半壊の状態になっていたが、奇跡的に死者、重軽傷者はなかった。このことでは深夜の寒さの厳しさから、寮生のだれもがふとんの中に深々と入っていたことで、飛散したガラス破片などの直撃も避けられたのではないか、と口々に話し合う声も聞かれた。

だが、近くの第三小松寮では、事情はまったく違っていた。同寮は直撃弾を浴びていたのだった。第三小松寮は南寮、中寮、北寮と三棟が並んでいたが、このうちの南寮に投弾が命中していた。寮生たちはだれもがいつでも飛び起きて、室外にかけ出せるように、モンペ姿のままふとんに体を横たえていた。このため彼女たちは爆撃を受けた直後、だれもがまくら元の防空ずきんと救急袋をつかむや、廊下に飛び出していた。寮の周辺では、すぐ西側の民家が真っ赤な炎をあげながら燃え上がっているのが望まれた。それは寮の至近に焼夷弾が投下されたことを教えていた。寮生たちは、だれもが日ごろからくり返していた防空訓練の順序にしたがって、寮に隣接した防空壕に続々と避難を始めていた。

こうして騒然とした寮内外の雰囲気の中で、直撃を浴びた第三小松寮から「倒壊の寮内に五人の生き埋めッ」との急報がもたらされてきた。さらに、それを追うかのようになり、別棟の職員室と用務員室も倒壊し、ここでも用務員室で二人の生き埋めが報告されてきた。現場では直ちに、これら生き埋めとなった寮生や用務員たちの救出作業に着手し、深夜の暗闇の中で必死の取り組みが始まった。

この第三小松寮の瓦礫跡がれきに、生き埋めになった五人の寮生の一人、同女専二年生齋清子いづきさん（一八）は、





京都女専第三小松寮の被爆

「それは本当に一瞬の間の出来事でした。夜も更けてきており、だれもが床についていました。私もうとうととしていたとき、何か爆音のような音を聞きました。B 29爆撃機の爆音なのか……と思いました。京都には爆弾はおちないだろうと思っていました。寮生の私たちの寢床というのは、ふとんに入った頭のところに短い足の机を置いて寝ていました。万一、爆撃があつて家具などが倒れてきましても、頭の方は机が守ってくれる要領なのです。みんなが正座して本を読んだりしていましたので、就寝時には各自ひとりひとりの机を、頭の上に立てかけていたのです」

「爆音が聞かれて間なしのことでした。突然、異様に大きな炸裂音が鋭く耳をうちました。いったい何の音なのか。それを確かめる間もなく、次の瞬間、私は何もかも分からなくなっていました。気絶したのか、どうなのか。何も分からなくなってしまうのです。そして、周囲から物音ひとつ聞こえないのです。何もかもが静まり返っているのです。何の音も聞こえない無音の、そして闇の世界というのは、言いようもなく不気味なものなのです。私はそのとき、自分は生き埋めになったが、それでも生きているッ、自分には意識があるッ、と自分に言い聞かせました」





被災後の整理作業にあたる京都女専の寮生たち

「このとき、何が起こったのか。あとで知らされたことですが、私たちの寝ていました第三小松寮の二階がくずれ落ちてきていたのでした。このため一階で寝ていた私たちは、その瓦礫の下に生き埋めになっていたのです。手も足も、体はまったく動きません。何か底知れぬ巨大な力で、闇の世界にしばりつけられている感じなのでした。でも意識ははつきりと返ってききました。そして、顔を上に向けたままの姿勢で呼吸はできるのです。それは、寝るときに頭の上に置いていた小さな机が、降り注いできた瓦礫の中にわずかな隙間をつくってくれていたのです。た」

「そんな状態で何時間いたのでしょうか。もちろん私には分かりません。ただ何も聞こえない瓦礫の下の暗闇の世界に、異臭が漂い始めたのです。それは何か燃えている臭いなのです。瞬間、近くに火事が発生し、延焼している、と直感しました。私は急に怖くなりました。そして、このまま体の動かない状態で焼けてしまうのかと思いますと、そのときは熱いだろう、苦しいだろう……と、たまらなく怖いことばかりが浮かんでくるのです。私はもう、たまらなくなりました。『おかあーさーん』という声を聞きました。同室の下級生が、私と同じように生き埋めになっていたのです。彼女もやはり、小さな机を頭の上に置いて寝ていたので、私とまったく同じ状態になっていたのです。彼女の喉奥を引



き裂くような声に、私は思わず涙が出てきました。その涙は止まらないのです。そして、時間はだいたいぶ経つただらうと思いましたが、体は依然、しばらくつけられたように瓦礫の底に埋められたままなのです。私は火事で焼け死んでいく恐怖感を必死にふりはらい、だれかが助けにきてくれるツと念じながら、じつと暗黒の世界に耐えていました」

「生き埋めになって何時間たったでしょうか。手足は依然、無形の巨大な力でしばらくつけられたように動きません。暗闇の中での不安は、やはり火事が広がってきたら自分もこのまま焼け死んでしまう。そのときは、さぞかし熱いだろうなという思いでした。そんな自分が閉じこめられたままの暗黒の世界で、何かの音を耳にしたのでした。それまではまったく音も、声もきこえない瓦礫の底でしたが、何かの音……いや、人の声のようなものを耳にしたのです。私は全身の神経を耳に集中して、この音を聞きのがすまいとしました。それは間違いもなく人の声でした。しかも私の頭の上で声高に叫んでいるのです。『生きていますかッ』と叫んでいるのです。私はもう必死の力をふりしぼって答えたのでした。『生きていますッ』と。この叫び声が頭の上の人たちに聞こえたのか、あたりが急に騒がしくなってきました。そして、騒々しい声のなかから腕が一本、二本、さらに三本と伸びてくるのです。この腕が私の上半身をつかみました。やがて、瓦礫の底に埋められていた私の体は、幾本もの腕で地表にひきずり出されたのでした。周りに担架が来ていました。私は担架に乗せられました。でも生き埋めの間、エビのようにひざを折りまげたままだった姿勢から体が伸びないのです。私はくの字にまがった体のまま、救護所に運ばれたのでした。その同じとき、私と一緒に生き埋めになった同室の下級生も瓦礫の下から助け出されました」

「後日談になります。手当てを受けてようやくやく元気になりました日、学校の生徒監の先生がみえました。そして、厳しい口調で『このことは絶対に、だれにも話してはいけないことです』と言われました。さら



に『おうちの親にも話してはいけないことですよ』と口封じをされたのでした」

この空襲の夜、同女専二年生、古林勝代さん（一八）も、第三小松寮の近くの第一小松寮内にいた。古林さんは――

「空襲はみんなの眠りについて間なしの時間帯でした。突如、地面を引き裂くような大きな音がしました。そして次の瞬間、すさまじい爆風で粉々になった窓ガラスが、おふとんの上に降り注いできたのでした。あわてて起き上がった私の視線の向こうには、ガラスの飛び散った後の窓のあたりで、たれ下がったカーテンが寒風に揺れていました。私たちは空襲に備えて、いつでも起きられるようにモンペ姿で寝ていました。すぐに起き出すと防空ずきんと救急袋を手にしました。二階の廊下を小走りに階下に下りようとしたとき、壊れた窓ガラスの向こうに火の手のあがるのが見えました。焼夷弾が民家に命中したのだ、と思いました。みんなが寮の近くにつくられていた防空壕に入ってきました。そして、頭上の爆音が途絶えるのを待ちかねたように、バケツを手にした幾人もの寮生が近くの火事を消すために走り出ていました。その直後でした。『寮生が五人、生き埋めツ』の急報があり、すぐに現場の掘り起こし作業が始まりました。もう寮の周囲一帯は修羅場のような騒ぎになったのです」

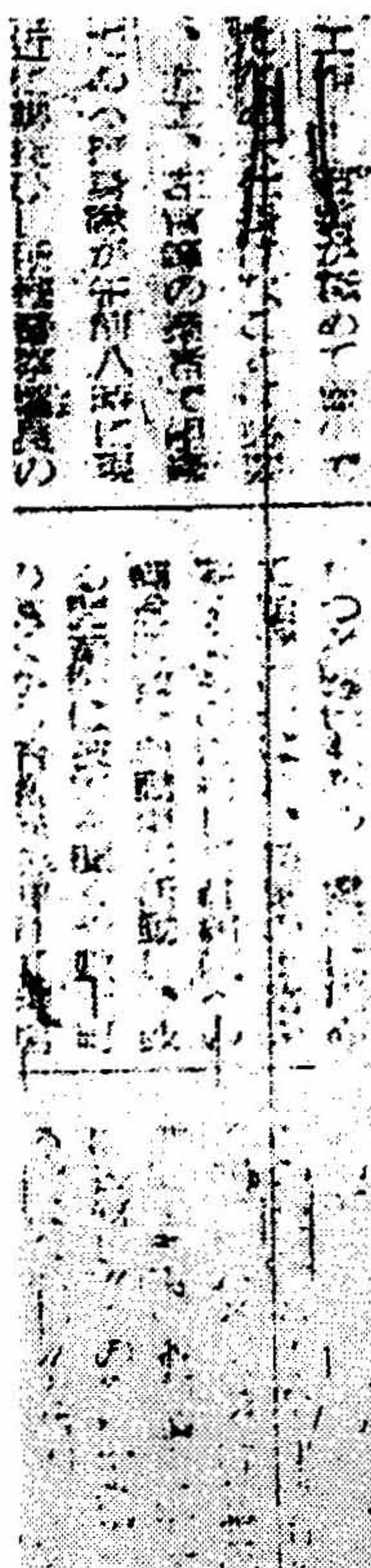
この生き埋めの寮生の救出作業は未明近くまでかかったが、生き埋めとなっていた五人の寮生たちは、いずれも懸命の救助作業で救出された。そして、一人が頭部に負傷したほかは四人とも軽い打撲傷を負っただけで、奇跡的にも、死者をみるという最悪の事態には至っていなかった。だが、深夜の突然の寄宿舎倒壊という予想もしなかった事態から、未明までの数時間、瓦礫下の暗黒の世界に閉じこめられた寮生たちの心の傷は、言葉には言えない深いものがあつた。また、これら寮生たちと同じように倒壊した職員室と用務員室の瓦礫下に生き埋め状態にあつた二人の職員も、無事に救出されていた。これらの救助作業に



# 被爆の家屋も

## 大半の修理完了

### 流言は絶対真まじ



馬町空襲後の報道

当たった人たちの表情にも、一様に安堵の色が流れたのだった。

これら京都女専への投弾被災の報告もあわせ  
て同夜、馬町一帯の空襲による被害は東山区修  
道町、上馬町、下馬町など十カ町、死者は三十  
五名、火傷を含む重軽傷者は五十六名にのぼっ  
ていた。また、家屋の被害は全壊家屋二十一戸、  
半壊家屋九十四戸、そして全焼九戸、半焼七戸  
(一棟)と集計され、これらの関係被災者数は合

計七百二十九名となっていた。

ただ、軍と警察の嚴重な報道管制下にあつた状況から、一般の市民にはこの惨状は、依然知らされないままであつた。そして、新聞に報道された空襲への関係記事は「米軍の再度の空襲がいつ、あるかもしれない」という注意を呼びかけるもので、あわせて空襲時の注意事項として「死者の中には圧死者が多く、主として頭部をやられていることから、(夜間などは)ふとんをかぶること」「足の負傷も多いので、はき物を完全にそろえておくこと」などの事項が報じられていた。さらに、空襲で自宅を壊されたり、火事で焼け出された人々は、当然のことながら、くずれ落ちた自宅の廢墟跡に立ちすくみ、呆然となつているところをめぐつて「救援にかけつけた人の最初にやることは、まず呆然自失している被災者を、取りあえず収容所(一時避難所)に収容することだ」とも強調していた。

これらの記事を注意深く読んだ人々の中には、その行間に、空襲に遭遇した現場の生々しい状態を感じ



とる人もあつたが、事実報道が厳しく規制された中であつて、そこまでの事態を読みとる人の数は限られていた。その一方で、夜間の空襲への警戒心を強調するため、灯火管制をめぐつての対応には十分な対策が必要なことがくり返し説かれていた。そして、これがために必要と思われる準備を怠つていた民家に対して警察署（中立売署）が厳重な注意を行つたことまでも報道されていた。ただ京都にとつて初めての空襲がもたらした教訓には、このように市民の防空への注意もさることながら、東山区馬町一帯の被災者や被災建物に、軍の施設や軍需工場はまつたくなく、すべてが民家、神社、寺院、学校という非軍事施設で占められていたことであつた。

このことは、前年十一月から開始されたマリアナ基地発進のB29爆撃機の日本本土への空襲が、大都市の軍需工場への投弾とあわせて民間人の住宅、学校なども無差別に爆撃する空爆作戦に拡大されたことを告げていた。事実、当初の米軍の作戦は大都市周辺の軍需工場に標的を絞つた空爆となつていたが、年の改まるのと軌を一にするかのように軍需工場破壊優先論の現地軍指揮官I・ハンセル將軍を更迭し、K・ルメイ少將を新たな爆撃兵団長に任命し、一般民家への集中的な焼夷弾爆撃も並用する作戦に転じていたのであつた。

## 以後、半年間に二十五回の空襲

京都への空襲は一月十六日の市内東山区への第一回に続いて、第二回目が同月二十三日、宇治、久世地区と船井郡から報告されてきた。これは第一回目の空襲が深夜であつたのと違って白昼の空爆で、宇治、



久世地区では午後二時四十分ごろ、船井郡内では同三時すぎと報告されてきた。また、第一回目の空襲が大型機からの投弾だったのとも異なり、宇治、久世地区では小型機による「銃撃」となっていた。さらに、同月二十九日にも三回目の空襲が相楽郡上狛村（現山城町）から報告されてきた。

そして、これらの地区での被害は宇治、久世地区への銃撃で各四人ずつ、計八人の負傷者をみていたが、船井郡内と上狛村では投弾をみながらも負傷者、被災家屋とも皆無であることが判明した。これは船井郡内では十一発の投弾が山林の斜面に落ちており、上狛村では五発の投弾が一部、ぶどう畑に砂煙をあげたが、他はすべて木津川の河原で炸裂し、付近に人影のなかったことが幸いしていた。ただ、この「銃撃を受く」との報告は、明らかに空母搭載の艦載機の来襲を告げており、高高度から飛来するB29爆撃機の投弾とは違って、今後に執ような銃撃の反復を予測させる無気味な報告と受けとめられた。

この時期には、沖繩への進攻作戦を前にした米軍が、有力な機動部隊を日本本土の周辺洋上に展開させ、沖繩への後方基地とも目される九州から四国、中国、さらに近畿地方に相次いで空爆を試みていた。その一方で、サイパン基地をはじめマリアナ諸島の各基地を発進するB29爆撃機編隊も、これに呼応するかのように百機を超える大編隊を出撃させ、日本本土への空爆は日を追って激化しようとしていた。

そして、月が改まった二月からの京都地区への空襲は、以下のように続開された。

二月四日白昼 久世郡久津川村（現城陽市） 投弾八十三発 死傷者なし 被災家屋三十一戸。

三月十九日夕刻 南桑田郡西別院村（現亀岡市） 投弾九発 負傷者一人 被災家屋四戸。

三月十九日夕刻 京都市右京区春日通高辻付近 投弾三発 死傷者なし 被災家屋三戸。

四月七日白昼 相楽郡山田荘村（現精華町）山林 投弾一発 死傷者なし 被災家屋もなし。

四月十六日白昼 京都市右京区太秦巽町周辺 投弾十発 死者二人負傷者四十八人 被災家屋十六戸。



四月二十二日朝 京都市北区紫竹、大宮、上賀茂一带 銃撃 負傷者四人 被災家屋なし。

五月十一日朝 京都市上京区御所、河原町荒神口一带 銃撃 負傷者十一人 被災家屋なし。

同日ほぼ同時刻 京都市中京区西ノ京銅駝町、三興線材付近 銃撃 負傷者一人 被災家屋なし。

同日時刻不明 綴喜郡有智郷村（現八幡市） 投弾一発 死者一人 被災家屋なし。

六月一日朝 相楽郡木津町 銃撃 死傷者、被災家屋ともなし。

同日ほぼ同時刻 久世郡御牧村（現久御山町） 投弾一発 死傷者、被災家屋ともなし。

六月五日早朝 相楽郡加茂町 投弾一発 死傷者、被災家屋ともなし。

同日ほぼ同時刻 綴喜郡田辺町 投弾一発 死傷者なし 被災家屋一戸。

同日午前八時四十分 綴喜郡多賀村（現井手町） 投弾四発 負傷者三人 被災家屋なし。

六月九日午前八時半 久世郡久津川村（現城陽市） 投弾百発 死傷者なし 被災家屋二戸。

同日午前九時三十分 相楽郡高山村 投弾二十一発 死傷者、被災家屋ともなし。

同日同時刻 相楽郡笠置町 銃撃 死者一人 被災家屋なし。

同日午前九時五十分 相楽郡西和東村（現和東町） 投弾十二発 死傷者、被災家屋ともなし。

以上が六月上旬までの報告集計となっていたが、こうして京都地区への空襲は一月から六月上旬まで計

二十三回にわたってくり返されていた。さらに六月中旬に入ってから、北桑田郡平尾村（現美山町）と、

奈良電鉄（現近鉄）の桃山御陵駅—小倉駅間の線路への投弾が行われた。

だが、京都地区への空襲はそのほとんどが単機か少数編隊機によるもので、投弾のなかには南山城地方の山林などで炸裂するものも多く、大編隊によって市街地への集中爆撃をみる例は報告されてきていなかった。



それでも四月十六日白昼の市内右京区太秦巽町一帯への投弾は、十発の炸裂弾によって死者二人、重軽傷者四十八人、全半壊の家屋十六戸（棟）という被害を与えていた。この空襲をめぐって『かくされた空襲と原爆』（つむぎ出版）では――

「最初の京都空襲があつた東山付近は、古い神社や仏閣がならび、軍事施設のまったくない住宅地でしたが、京都市周辺には、いくつかの重要な軍事施設や軍需工場がありました。京都府南部の宇治市から精華町にかけては、陸軍の火薬製造所や弾薬庫がひろく設けられ、航空機製造工場や軍の飛行兵訓練用の飛行場が……さらに府北部には日本海に面した唯一の海軍軍港、舞鶴があつて、日露戦争の時代から、対ロシアの重要な軍事拠点として整備されてきました。陸軍と海軍の両方の拠点があつたのは、全国で広島と京都だけです。……現在の京都市域に関していえば、一つは、伏見区にあつた陸軍第十六師団の司令部とその配下にあつた各部隊の兵舎が、最大の軍事施設でした。しかし、これらの部隊に所属した兵士は、アジア・太平洋戦争（いわゆる「太平洋戦争」）がはじまつてからは、主にフィリピンなどの東南アジアに派遣され……残っているのはわずかな数の留守部隊でした」

「また、京都市右京区太秦一帯にあつた三菱重工などの軍需工場も、小規模ながら空襲を受けています。一度は、四五（昭和二十）年三月十九日で、このときは一人が負傷しただけで、大きな被害は出ていませんが、その一カ月後の四月十六日には、死者が出ています。……この日、ちようど昼頃、京都上空を東から西へ飛んでいたB29一機が、右京区太秦巽町にあつた第十四製作所ほか四カ所に、二五〇キロ爆弾十個を投下しました。昼時で、工場の労働者の多くは食堂に行っており、また、同時に爆弾の落ちた民家の住人も外出中であつたため、死者は少なかったのですが、それでも、三菱重工の工員など二名が亡くなっています。また、重軽傷者は四十八名で、その中には、学徒勤労働員で三菱重工に動員され働いていた中学



生と高等女学校の生徒も含まれていました。さらに、工作機械や家屋などにも被害が出たとされています。……しかし、この空襲の場合、新聞はわずかに『再び京都府下へ投弾』と記しただけで、それ以上の報道はされていません。したがって、京都市民の多くは、事実をまったく知らなかったといってもよいでしょう。『京都もまた戦場』といわれながらも、ほとんどの市民は、やはりいまだに空襲の恐ろしさを知らずに過ごしていたわけです」

しかし、京都の人たちのなかにも大空を圧したB29大編隊による大空襲の恐怖を、身をもって知らされていた人も少なくなかった。それは大阪に勤務、あるいは商用、通学などのため往復していた人たちであった。これらの人たちは勤務中や学業の間に、幾度となく空襲警報を聞かされていた。そして、ついには大空襲の現場に自らを置くことを余儀なくされていた。そこに見たものは、まさに地上の地獄としか言えない悲惨な光景であった。

京都市内の山科の自宅から大阪市内の病院に助産婦見習いとして研修を続けていた弦川キミさん（一九〇〇年、その一人であった。彼女は――

「そのころ、私は大阪・天王寺にあった聖バルナバ病院で助産婦見習いとして研修中の身でした。聖バルナバ病院は東京の聖路加病院の姉妹病院としてもよく知られていた大きな病院でした。私は自宅のある京都・山科から大阪に行くのに京阪電車を利用していました。病院では見習い研修中の五十人全員が寮に入る全寮制でしたが、私は休日になると、ときどき京都の自宅に帰っていました」

「それは、忘れもしない三月十三日の夜のことでした。この日は幾回となく警報が出されては解除され、また警報が発令されるということを繰り返していました。そして、夜間に入りましてB29爆撃機の大編隊



がやってきたのでした。私たちは夜間、寝るときも防空ずきんをつけたまま仮眠をとっていました。その私たちの頭上に現れたB 29大編隊から、焼夷弾の一斉投下が始まったのでした。その直後の光景は、形容の言葉に『雨あられ』と申しますが、この夜の夜空にまかれた焼夷弾の落ちてくる様子は、まさに雨あられそのものでした。次から次へと落ちてくる焼夷弾の下で、もう生きた心地はいたしません。あちこちから猛炎が噴き上がってきました。その焼夷弾の雨は私たちの病院の寮にも降りそそいできました。その直前に、私は寮内の自分の部屋に飛び込んでいたのでした。なぜかと申しますと、私は自室のなかから、最も大切にしている物をぜひ持ち出したいという強い衝動に突き上げられていたのでした。このため私は頭上を覆う爆音と、すでに降り始めていた焼夷弾の雨のなかを、無謀にも寄宿舎に飛び込んだのでした。そして、自分の部屋から夢中で手にした物を抱きかかえて、寮の外へ飛び出し防空壕にかけ込んだのでした」

「その直後でした。焼夷弾が寮を直撃したのです。寮は猛炎に包まれ始めました。私は一分間、いや五秒ほどの差で猛炎の中に閉じ込められるのを避けた自分に気付きました。その瞬間、防空壕内の私の背筋に、思わず冷たいものが走りまわりました。壕内に戻ってから荒い呼吸の静まるのを待つと、私は、自分が持ち出した物を改めて見直しました。胸にしつかりと抱きしめていたのはオマク……まくらでした。どうしてまくらなんかを持ち出してきたのか。私にはまったく分からないのです。あの一瞬、私の最も大切なものだと直感して持ち出したものが、なんでまくらなのか。私は全身から力の抜けるのを感じました。でも考え直してみますと、人間なんてとっさのときにはそんなことしかできないものだ……と思い直しました。それよりも大変だったのは、もうあちらでもこちらでも猛炎に覆われ、私たちの寮も焼けおちてしまったことでした」

「夜が明けまして壕外に出てみて、本当に驚きました。一面、焼け野原と申しますが、街がないのです。



天王寺の私たちのところから築港まで見渡せるのです。だれもが、あまりの廃墟跡に呆然としたままなのです。それからがまた、大変でした。病院では多くの赤ちゃんを避難させていましたが、この赤ちゃんのお湯を水道の水も出ないので、焼け跡に水道口を探し、道端にあつた炊事用の大鍋を拾ってきてお湯をわかし、沐浴を始めたのでした」

弦川さんは「その後、久しぶりの休日に京都の自宅に帰ってきて、京都には緑の樹々もあり、家屋もきちんと並んでいるのをみて、ほっとした」という。だが、京都でもそれまでの二十五回の小規模な空襲と違って、百八十八人の死傷者を出す二十六回目の空襲、いわゆる「西陣空襲」の日がすぐ迫っていたのだ。



京都の戦場

2

# 京都空襲

ISBN4-87699-270-3

C0321 P2200E

定価2200円(本体2136円)

久津間 保治

L216.2

72

